



TITLE:

(随想)恩師杉村先生を訪ねて

AUTHOR(S):

穴戸, 仙太郎

---

CITATION:

穴戸, 仙太郎. (随想)恩師杉村先生を訪ねて. 泌尿器科紀要 1960, 6(6): 425-426

ISSUE DATE:

1960-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111966>

RIGHT:

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 6 巻 第 6 号

昭和 35 年 6 月

## 随 想

### 恩 師 杉 村 先 生 を 訪 ね て

東北大学教授 宍 戸 仙 太 郎

昭和35年5月28日東京で開催された国際自律神経研究会に出席したのを機会に杉並区成宗町の自宅に杉村七太郎先生をお訪ねした。先生は午前10時半清楚な応接室の一隅の椅子に腰かけ、下半身に温い薄い毛布をかけて静かにテレビを観賞していた。昨年4月東北大学に泌尿器科教室が創設された時に舟生助教授と共に挨拶に参上した時よりみて一年目である。昨年は大部お年を召されたなという感じであつたが今年は昨年とは見違えるばかりの元気さで、81才とは思えない若さがあつた。この一年間の小生の教室の様子などを丹念に聞かれ、時に昔を思い出す如く、こんな研究はこんな風にしたい方がよいなど話されていた。殊に若い頃ドイツに留学されていた時の生活はよく記憶されていて先生がお世話になっていたドイツ人の話などが始まると20年前のあの元気のよかつた停年当時の先生を彷彿とさせるものがあつた。

30分位で辞去したが御元氣な笑いをうかべておくつてくれた先生のお顔を思い出しながら帰りの車の中で昔のことを種々思い出していた。

昭和10年3月小生東北大学を卒業した時に仙台で有名な病院を経営していた岩本正樹博士に入局の相談に行つた。先生は「どこでもいいが自分は杉村先生の弟子であり、教室における間随分と叱られたが、入局するのはここに限りますよ」という話であり、わざわざ御自身で杉村先生の所につれていつてくれた。学生時代私達には全く恐い先生であり、ポリクリなどでは冷汗を流す程であつたのでうまく勤まるかどうか半心半疑でおどおどして教授室に入つていつたら「君、外科医になるのには酒を飲んではいかんよ、手がふるえたらお終いだからね」と一言云われた。小生余程酒飲みに見えたらしい。

入局してからは先生がお酒をお飲みになつたのは余り見たことがなかつたが、後で医局で先輩より聞いた所によると杉村先生は佐藤外科の四天王の一人で新潟医専におられた時は随分と勇ましくお飲みになつたとのことである。先生が停年退職なされてからの同窓会ではよく酒をお飲みになつておられたが、くづれた恰好をしたのは一度も見たことがなかつた。

昔は年に一回医局旅行があつて温泉に行つたことがあるさうである。ある時医局員の一人がよつぱらつて「杉村君、今日は愉快だね」と肩をたたいたことが余程氣になつたとみえ、それ以後医局旅行は取り止めになつたと聞いている。

東北大学で恐い教授はと聞かれると一に杉村、二に加藤（現国立仙台病院長）という合言葉があつた。小生あとで国立仙台病院に勤務した時に加藤先生によく面倒をみられたが、加藤先生よりは杉村先生が一段と恐ろしかつたと記憶している。

余りに叱られた為に教室を辞めようなど云う人も出たが石川助教授（現神戸医科大学教授）や同僚になぐさめられて思い止める人があつた。杉村先生が夕刻6時に教室よりお帰りになる時は当時病院前にあつた田沼というタクシー屋に小使が電話をかける習慣があつた。帰えると小使は今帰つたことを医局に直ちに報告にくる。とたんに医局は賑かになり倉庫に入つておつた仁義（？）のビールを出して杉村先生に叱かられたのを思い出しながら大いに飲んで鬱憤をはらす人もあつた。こんな具合で医局の団結は強かつたし、叱かられれば叱かられる程心臓が強くなり、少々のことにはびつくりしない様になつてくる人が多かつた。

又杉村先生は叱る一面すべての点に几帳面であつた。患者を紹介してくれた医者には必ず症状を報告する病状報告書なるものがあり、これに万一記載しないものだつたら破門になる位叱かられた。ある時小生の同級のI君がうつかりして記入しなかつたが、ある時先生に発見され、えらい騒ぎになつて了つた。結局先生になぜ報告しなかつたといわれ、「なぜ、なぜ」と詰問されたわけである。I君困つて「忘れたのです」と本当のことを云つたとたん「若い者のくせに忘れるやつがあるか」と雷が落ちたのを憶えている。

えらい先生にも恐ろしいものが二つあつた。一つは芸者で他は新聞記者であつた。若しこの両者が入院する様なら受持医はえらいことでいつも先生に牽制され雷の受け通しであつた。

泌尿器系の疾患も随分と集つて来た。腎臓の手術はいつもよどみなく行われていた。毎回の手術日に鉤引きをやつたことを思い出すが、うつかり鉤をゆるめるものなら雷が落ちるので手術が終るまでそのままで終つた時は手首が曲らない程であつた。この当時は勿論麻酔は局所麻酔であつたから尙更大変であつた。多数の腎摘術を見る機会を得たが、杉村先生も一回だけ腎摘をあきらめた症例がある。それは陸大出の某大尉、腎結石で手術後の尿瘻を持ち水筒を腰にぶらさげて東京より来た患者であるが、癒着の為腎摘を断念せざるを得なかつた。

東北、北海道は勿論、関東方面よりも大部集つた。石原將軍も *Blasenpapillomatosis* で長い間焼灼術を行つていたのを記憶する。

ある時一等室の女の患者で P.S.P. の試験をやることになつたが、小生が注射しようとしたら、婦人なもので先生御自身で注射をなさつた。これが小生、先生の注射を見た一回だけであるが、勿論うまく入らず大部分もれて了つた。あとで検査書を見たら、P.S.P. *intra-venös, teils subcutan* と記載されていた。

丁度車は上野駅、一時間の間昔のことを思い出していた。あの元気のよかつた先生が、今尙元気で応接室でテレビを見ている。それも午前中から全く胸あたたまるものがある。先生には今後も益々御健康に御注意、長寿を全うなさいませう様御祈りして擲筆する次第である。

(昭35.5.29)

## 日本泌尿器科学会第11回中部連合地方会

### 予 告

期 日 : 昭和35年11月3日(木)

会 場 : 大阪医科大学

演題締切 : 昭和35年8月31日(300字以内の抄録同封の事)

申 込 先 : 高槻市・大阪医科大学 高木峻徳宛(書留便)

特別講演 男性不妊の研究 大阪医科大学皮泌科学教室 石 神 襄 次 教 授

招請講演 1) ある面よりみた腎炎 大阪医科大学病理学教室 浜 本 裕 二 教 授

2) 演題未定 大阪市立大学医学部外科学教室 原 田 直 彦 助教授